

インターネットラジオ局がつくる“読む”ラジオ

AWAPURADIO

アワプラジオ通信

2017.1

アワプラジオ通信は千代田区社会福祉協議会（東京・九段下）の中にあるちよだボランティアセンターに置かせていただいています。また、アワプラジオやメンバーがかかわるイベント等でも配布しています。バックナンバーがウェブサイトでダウンロードできます。置き場を提供して下さる方も随時募集しています。発送を希望される方もお気軽にご連絡ください（連絡先は裏面）。

<アワプラジオとは> 認定 NPO 法人 OurPlanet-TV で出会った仲間で、2009 年に開局したミニ FM、インターネットラジオ局です。名称は OurPlanet-TV の略称であるアワプラにちなんでいます（アワプラとは別々の団体です）。

『Abe's VIEW』 Vol. 25 『規制をすることで自由が生まれる』……これは名言』

12月13日付けの東京新聞夕刊に、フランス映画「男と女」に出演し、その主題歌を手がけたことでも知られるピエール・バルーさんのインタビュー記事が掲載されていました。主宰する音楽レーベル「サラヴァ」が50周年を迎え、記念のCDが発表されたという内容です。「男と女」のヒットで得た資金でレーベルを設立し、才能を発掘してきたというバルーさん。自身もシンガーソングライターである彼が、創作のとき韻を踏んだ詞にすることを課しているということに関して「規制をすることで自由が生まれる。あとは出会いに対していつでもスタンバイです」と発言していてとても心惹かれました。

規制をすることで自由が生まれる……。規制は取り払い自由を求めるのではなく、自由を生み出すためにむしろ規制をかけるという発想に目からうろこが落ちました。確かに理屈の上では「規制があるからその反対に自由は成り立っている」という点を理解することはたやすいでしょう。とはいえ私たちは、自由のほうは自ら積極的に求めるものであるのだとは感じられても、規制に関しては大半が外的要因によってもたらされるもの、むしろ無いに越したことはないというふうにとらえてしまうのではないのでしょうか。ところがどっこい、解放ではなく律することのほうが自由の創造主だったとは。

生きてると大なり小なり、思いどおりにならないことはよくあるものです。考えてみればそんなときに焦って空回りを続けてしまうのは、そのいわば規制されている状況を悪ととらえて、とにかくそこから逃げ出そうとしているときのように思います。ただ一度、現状を受け入れてしまえば、あっさり解決の糸口が見つかることはよくあることです。またあえて可能性を断ち、規制をかけることで取捨選択せざるを得なくなる分、一点集中で成果をあげられることにもつながります。

今から10年以上前、わが故郷である山口市の中原中也記念館でピエール・バルーさんのコンサートを観たことがあります。友人に教えられて、こんな田舎で彼のコンサートが観られるなんて、と驚いたことを覚えています。「規制をすることで自由が生まれる」。この名言、心に刻んでおきたいと思います。（阿部浩一）

ヨムヨム旅行記 遺跡にビーチ！欲張りに楽しむユカタン半島への旅①（メキシコ）



どうせ海外へ行くなら観光もリゾートも楽しみたい。そこで選んだのがメキシコ・ユカタン半島への旅だった。

カリブ海に突き出たユカタン半島には、マヤ文明時代の遺跡が点在している。マヤ文明といえば、2012年12月に世界が滅びるという予言が話題になったこともあり、いつか行ってみたいと思っていた。半島の先端にあるビーチリゾート・カンクンを拠点に、マヤ文明の遺跡群・チチェンイツァへのバスツアーに参加した。

バスで3時間、パイナップルの葉の形に似た、竜舌蘭という植物の畑に飽きてきたころ、国立公園に到着した。ちなみにメキシコで有名なテキーラはこの植物を蒸し焼きにして発酵、蒸留して作られる。

公園に入って間もなく、四角錐のピラミッドが現れた。頂上に神殿を配したこの建物は、暦のピラミッドと言われている。一面ごとの階段数が91段で×4面、さらに頂上の神殿を足すと365段となり、地球が太陽の周りを回る周期を表している。さらに1面あたりの階層数は9段、真ん中に階段があり分断されているため倍の18段となり、これはマヤ歴の1年（18か月と5日）を示している。

訪れた日は秋分の日、太陽が西に傾く時間になると、ピラミッドの下部に取り付けられた蛇の頭部の石像へ向かって、階段の側面にジグザグ模様の影が浮かびあがる。マヤ神のククルカン（羽毛の生えた蛇）が降臨する瞬間を描いたイベントだ。この現象によって秋分と春分をも知ることができ、農作物を作るために重要な役割を担っていた。

同じ敷地にあるカラコルは天文台のピラミッド。ここから天体を観測して、星の距離や太陽の動きなど、現代とほぼ変わらない精度の解析を行っていた。未来の話なのかと戸惑ってしまうほど、マヤ文明は緻密で高度な技術を擁していた。

そうした技術で弾きだされた日付が2012年の12月だったのだが、これはマヤ文明の「歴史は繰り返す」という宗教観の中のひとつの区切りだと言われている。予言はさておき、もしマヤ文明が滅びなかったら、今ごろ人類は宇宙に住んでいたのかもしれない、と空想したくなるほど興味深い観光となった。（浅香友里）

ブルーに生まれついて (2015年・アメリカ/カナダ/イギリス合作) ロバート・パドロー監督 ※R-15 指定



天才ジャズミュージシャン、チェット・ベイカー(1929~1988)。その中年期にスポットを当て、過去をまじえながらその栄光と孤独を浮きぼりにしていく。97分の中でどこか流れるように物語は進んでいく。短編小説のような味わいだ。

1970年代、ベイカー(演・イーサン・ホーク)はどん底にいた。ドラッグ中毒でステージからは遠ざかる。さらにドラッグの売人に歯を折られ、音楽活動ができなくなってしまう。仕事がなく、ガソリンスタンドで働き、入れ歯をはめてトランペットの練習に励み……。あのベイカーですら低迷期には、ガソリンスタンドで働いていたなんて……と驚きを隠せない人も多いはず。ややおぼつかない歌声も演奏も「悲しく切ない」メロディーに変えて復活していくのは天才のすごさなのか。

甘いマスク、音楽の才能、女たち。すべてを手にしても黒人の音楽である「ジャズ」の世界で白人のスターとして抱える孤独、コンプレックス。黒人ジャズの巨匠マイルス・デイヴィスへのライバル心。音楽でしか満たされない哀愁がただよってくる。彼を支える恋人ジェーンは、アゲマンの鏡のような女性だがつかみどころがない。ドライな空気感だからか私たちはジェーンとともにベイカーに惹かれ、見守るような気持ちになれるのだろう。

ワガママで無邪気で子どものような面を持つベイカー。イーサン・ホークが歌う「マイ・ファニー・バレンタイン」もすばらしい天才のほろ苦いストーリー。(宮内華子)

『GREEN BOOKS』 ~本の紹介~

コンビニ人間 (2016年7月) 村田紗耶香 著 文芸春秋・1404円



第155回芥川賞受賞作。主人公の古倉恵子は大学時代から同じコンビニで18年間バイトを続けている。恵子の働くコンビニに、白羽という同年代の男がバイトで入ってくる。恵子は白羽を自分のアパートに住ませることになる。

恵子は子供の頃から現在まで一貫して、世間一般の明文化されていないルールや、人の感情の機微を理解しない。口調や服装は周囲の人を観察し適応している。白羽はコンビニのバイトを軽くみて真面目に働かず、結婚せずバイトを続けている恵子を「底辺」と言う。この2人の同居は恋愛関係が生じたためのもなどではなく、白羽のダメ人間ゆえのなりゆきと、恵子の世間の常識を超越した感覚から編み出された発想により成立していく。2人の同居生活の場面はかなり異様で、読んでいるうちに人は一体どうして結婚するのだったかと足元が揺らいでくる感じがする。

恵子は人間関係においては完全に社会に適応しているとは言えないが、コンビニ店員としては、棚の配列から掃除の状況や客への対応にまで気を配り、完璧に適応している。人との関係性の豊かさはなくても、与えられた仕事にそれと一体化してしまう程に真摯に取り組む人生は豊かだ。参加できる局面で、参加できる形式で社会に関わっていけばいいのだと本書によって勇気づけられた。(大森周子)

過去の紙面から アワプラジオ通信の前身「ヒトナリ」に掲載された原稿を再掲します。

私は小中高の9年間、母の実家である山口県下関市の田舎の地域で育ちました。祖父母は農業を営んでおり、牛小屋からはどかな鳴き声が聞こえ、犬も鶏も、勝手気ままに庭を歩きまわっていました。現在もある、私の通った小学校は、当時レトロな雰囲気の木造校舎でした。確か私が5年生のときに、創立100周年の祝賀会があったくらいですから、今や相当歴史のある小学校だということになります。

何はともあれ、私はゴシック建築(昔の西欧風建築)そのものの、講堂が大好きでした。春は桜、菜の花、レンゲが咲き乱れ、夏は青々とした水田の稲がさやさやと風に吹かれ、入道雲の下、アイスキャンディ屋さんが旗を立てて自転車でやってきたものです。秋で印象に残っていることといえば、町内総出の大運動会、虫の鳴き声の中、母が打ち直してくれた布団に包まれて寝たことです。

冬はやはり餅つきでしょう。ご近所から4、5軒が集まって、朝は暗いうちから餅米をかまどで蒸して、白と杵でつき、餅とり粉がまかれた広い板の上でちぎっては、次々と丸い餅が出来上がっていきました。外は必ず真っ白な雪でした。

昭和でいえば30年代当時、あの頃は四季がはっきりしていました。そして折々の祭りや行事を大切にしていたのはもちろんですが、それぞれの季節に必ず、香りというのか、匂いがありました。私はいまだにその匂いを忘れられないのですが、近頃は残念ながらそれを感じることはありません。(「私の昭和30年代」2013/12/1・阿部美知子)